



1. ウィーン国立歌劇場で『道化師』ネッダに扮する東さん。歌声は劇場の隅々まで響き渡った 2. 日本女性の芯の強さと優しさが表現されているとして評価が高い『蝶々夫人』。1972年ニューヨークのメトロポリタン歌劇場にて 3. 毎年4月29日に催された「つくし野オペラコンサート」 4. CDや著書も多数。右のDVDは2016年、奇跡的に収録映像が発見された1973年4月東京文化会館での公演。全盛期の魅力が余すところなく伝わる 5. 娘の阿里沙さんと。蝶々夫人の子役として共演したことも 6. 「普段の生きざまが舞台に出る」と言い、家事も怠ることなく楽しんだ



開かれた世界の扉 プリマドンナとして生きる

1971年、日本人として初めてウィーン国立歌劇場の舞台に立ち、その後も世界各地の代表的なオペラハウスでプリマドンナとして活躍した東敦子さん。
ミラノから日本へ本拠地を移し、町田に住んでからの活動も印象深い。神様からの贈り物に感謝し、ひたむきな努力を続けた希代の名ソプラノは最期まで歌い続けた。

特集 2 オペラ歌手

東敦子

あずまあつこ 1936年大阪府吹田市千里山生まれ。1961年、東京藝術大学専攻科卒業後、イタリアのパルマ音楽院に留学。アヴァンツィーニ氏、バヴァロッチィを育てたカンボガリアーニ氏、活躍した日本を代表する声楽家。日本芸術院賞、毎日芸術賞など多く受賞歴を持つ。地域の文化向上に対する長年の貢献に、町田市から2000年市民栄誉彰を贈られた。

ジュリア・テス氏らに師事。ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場をはじめ、ベルリン・ドイツオペラ、プエノスアイレスのテアトロ・コロソ、モスクワのボリショイ歌劇場など世界中で1999年12月25日 帰天 享年63歳

歌劇場で主役を演じ、世界20数カ国、500回以上主演した『蝶々夫人』は世界一と絶賛された。それでもなお、たゆまぬ努力を続けていたという。

1978年から拠点を国内に移し、町田市つくし野に居を構えた東さん。帰国直後から国内外で演奏活動をする傍ら、後進の指導にも熱心に取り組んだ。東京藝術大学、東京音楽大学、そして玉川大学。

「本物の音楽を町田にも普及させたい」と1984年から12年間続けた「つくし野オペラコンサート」。町田フィルハーモニー交響楽団と東さんの歌声が駅前広場に美しく響き渡り、大勢の聴衆が酔いしれた。そして、奇しくも最後の舞台となったのは町田市民ホールだった。障がい者施設ベロニカ苑の「チャリティーコンサート」。実はこのとき、彼女の身体は末期の骨がんに侵されていた。「骨が崩れるかもしれないのよ」と懸命に止める娘に母は力強く言い放った。

「神様からいただいた歌声、これを最後まで人のために使い切りたい。これは私の使命なの」。敬虔なカトリックであった東さん。人生の幕を降ろしたのは翌年のクリスマス夜のことだった。

ミラノのゼナーレ通り13番地。レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」で有名な教会にほど近い石造りの家で、ひたすら歌の稽古に励む母の姿を、まだ子どもだった娘の阿里沙さんは鮮明に覚えている。イタリア発祥のベルカント唱法が紡ぐ、まろやかで軽やかな美しい響き。母の東敦子さんはソプラノ歌手として、世界の一流歌劇場を飛び回っていた。

大阪府出身の東さんは幼少期からピアノや歌に動かし、中学2年生のとき宝塚新聞社主催の音楽コンクールで優勝。それを機に四家文子氏の門を叩き、本格的に声楽を始め、その後東京藝大音楽科へ進学した。1961年、藝大の専攻科（現大学院）を卒業すると、9月にはイタリア政府の給費留学生としてパルマ音楽院に入学。在学中にアキレ・ペーリ国際声楽コンクールで優勝したことで、1963年レッジョ・エミリア市立劇場で公演されたマスカーニ『友人フリッツ』のスーゼル役を射とめ、日本人初のヨーロッパデビューを果たした。

パルマ音楽院を首席で卒業した後も、圧倒的な演技力と歌唱力で確固たる地位を築いていった。日本人として初めてウィーン国立歌劇場やニューヨークのメトロポリタン

協力：玉川大学教育博物館